

# 鶴見文化財学会報

## Tsurumi Cultural Properties A.C

vol.24  
2023年3月16日発行  
鶴見大学文化財学会

### 飲み会と履歴書

鶴見大学教授 宗基 秀明

「履歴書を出して」と、ある日、河野先生から前後の脈略もなく伝えられた。「え？」と答えると、「来年度、鶴見大学文学部に文化財学科を新設するのだけど、非常勤で来て欲しい」とのことだった。「あ〜、なるほどね」と思い出したのは、ある飲み会での出来事である。

とある中世考古学研究会の打ち上げで、午後の早い時間から15・6人の研究者達と鎌倉でビールを飲んでた。すると、私の席から少し離れたところで「宗ちゃんにポンポンポンとハンコを捺してもらえればいいのだ」という声が聞こえてきた。声の主は河野先生であった。飲み会が始まってからまだ小一時間ほどだが、すでに酔いが回っているようで、いつもは聞き取りづらい小さな声で話す河野先生が赤ら顔で、かなり大きな声で話していた。何の話をしているのか、そして話の前後関係も私には解らず、そのまま、やり過ごした。それからしばらくして、そんな話題も忘れかけていた頃、先の履歴書の話が出た。「あ、なるほど、この間の印鑑の話はこれなのか」。河野先生とは、私の大学院入学前に「暇ならば鎌倉の発掘に来ないか」とのお誘いを受けて以来のおつきあいであった。

インダス文明の勉強をしていた私は、縄文や弥生文化と異なり、生活面の上に遺構が築かれる歴史時代の発掘調査は、煉瓦遺構を残すインダス文明の研究にも役立つし、何より学費を賄えると考え、早速、鶴ヶ岡八幡宮の発掘現場に向かった。ところが、参加初日から毎夜の酒宴が始まる。八幡宮内の工務所の一面に建つ平屋が発掘参加者の宿舎となっており、自炊の夕食が酒盛りへと流れるのである。酒盛りは宿舎で終わるわけもなく、毎夜のごとく鎌倉の街へと繰り出し、酒場では市内の他の発掘現場の参加者も集合して、いつ果てるともしれない酒盛りがづづいた。

酒盛りの合間を縫って、原稿も書いていた。査読のある学術雑誌に掲載された最初の論文は、現

場で書き上げたインダス文明以前の新石器文化の遺跡表面採集土器の紹介文だ。その後、修論を書き上げ、博士課程に進んだ頃より中世考古学の原稿も書くようになり、インダスと中世考古学の間を行ったり来たりする40年が訪れる。発掘現場作業や報告書作成、そして論文執筆を続けていた80年代、私は鎌倉の発掘現場の主任や団長、それに5校ほどの大学で非常勤講師を引き受けていた。その非常勤の一つが鶴見大学の文化財学科となる。その頃の文化財学科では木曜日、教授会の後に合同研究室で学務運営会合と称した飲み会が毎週のように催され、木曜日に出講していた私も参加させていただき、そして毎週のように酩酊した。

こうして発掘現場と非常勤講師を掛け持ちする日々を続け、毎週、酔っぱらっていた2006年の秋、2時限連続の実習IBの中休みに合同研究室へとお茶を飲み顔を出した。すると、河野先生から「宗ちゃん、履歴書を出して」と再び突然言われ、私も再び「え？」とクエスチョン・マークそのものの顔で戸惑っていた。脇から「ドラさん、それじゃ判らないよ。ちゃんと話さないと」と、今は退職されたが、発掘現場や中世考古学の研究会でお世話になっていた伊藤先生が割って入ってきた。そんなやり取りを繰り返し、私を常勤で文化財学科にお招きいただいていることが判った。後に、うかがったところでは、合同研究室の酒宴(学務運営会合)で初めてお目にかかってから毎週のようにお会いした石田先生が、私を推薦してくださったとのこと。

人生、お酒を介した人付き合いは大切である。そして、「履歴書」の言葉には、日々の励みと人付き合いが集約されているのではないだろうか。

文化財学科へのお誘いをいただいたその夜は、いつもの木曜日以上に飲み過ぎてしまい、常勤の話の家内に伝えるのが翌日になってしまった。こっぴどく叱られたのは言うまでもない。飲みすぎには気をつけなければいけない。

## 教員からの贈る言葉

私が鶴見大学文化財学科に着任した10年前の宗基先生の印象は、「なんて厳しい先生なんだろう」であった。しかし今は全く違う。これは学生のことを考える故の厳しさだったのである。仏像に例えると、まさしく暗闇に迷う衆生を慈愛で明るい場所に導く不動明王である。

また先生は羨ましいほどの愛妻家で、奥様の話をしている時の先生の顔は菩薩のようである。

これまで先生の心配りには随分助けられてきた。改めて心からお礼を申し上げます。さらなるご研究の発展と、先生と奥様のご健康を心から祈念しております。  
(緒方啓介)

私が文化財学科の専任教員となった2016年の秋、実習IBの自身のクラスの授業の前に、宗基先生が担当するクラスの授業に出席させて頂いた。その初回の授業で、名札に自分の学籍番号と名前をレイアウトを考えて書く作業があった。学生たちが書き終わると、そのレイアウトについて、学籍番号と名前が離れていると読みにくい事、名前の最初の文字の位置に合わせて左寄せで学籍番号を書くこと違和感が無い事、その理由は、私たちの心臓が左にあるからである事の説明があった。学びの素材が身近にあることを実感した瞬間であった。宗基先生有難うございました。  
(田中和彦)

私は、昨春に鶴見大学文化財学科に着任してから約1年半ばかりを宗基先生にお世話になってきた。文化財学科での経験が長く、私が最も頼みにさせていただいている先生である。人事、入試、学生指導のことなど、迷った時には教員一同、宗基先生からの一言を待ち受けて耳を澄ませてきた。舌鋒鋭く切り込むように話されることもあるが、背景に大変細やかな配慮を感じることも度々だ。昼食時には海外調査や大学周辺地域の文化財関係のことなど、刺激多く、楽しく拝聴した。先生のご退職は心許なく寂しいが、研究に専念される時間をやっと手に入れられるわけであるから、感謝の念とともにお祝い申し上げたい。  
(矢島律子)

「うわ〜、カッコイイ！」 はじめて宗基先生をお見かけしたときの、偽らざる感想である。なんと言っても、とにかくスマートなのである。スラッとした見た目だけではない。会議でも雑談でも、先生のお話は常にサッと整理してピシッと要点を導かれる。だから、先生のお話を伺って、何をどのようにすれば良いかわかったことも少なくないし、あのようになりたいと憧れながら接させていただいた。

3年という短い間でしたが、本当に先生にはいろいろなことを教えていただきました。今後もご健勝であられることを衷心から念じあげます。  
(鈴木一馨)

いろいろと困った話題であっても、言葉の端々に愛情を感じられる飄々とした宗基先生の口調は、いつも安心して聞いていられるものでした。人を納得させるには、適切な判断はもちろんですが、ユーモアがとても大切だなと、その都度しみじみと感じたものです。そういう頼りになる先生が退職されるのは、とても心許ないことではありますが、たった一年とはいえ、ご一緒できて幸運でした。本当にありがとうございます。今後も叱咤激励をしに、大学に来てください。  
(西澤美穂子)

鶴見大学に着任するまで私にとって宗基先生は鎌倉考古学の専門家という認識であった。しかし、話を聞いてみると研究の原点はインダス文明で、鎌倉考古は紆余曲折のことだという。研究に限らず、とかく人は自分のやりたいことや考えに固執してしまいがちであるが、それに捉われず研究の幅を広げられてきた、その学識と経験、姿勢に多くのことを学ばせていただいた。私が日本史の枠を飛び出して研究することは難しそうだが、少しでも地域・時代・分野を超えた挑戦ができればと思う。これも宗基先生の残したものの一つと思っただけならば幸いです。  
(近藤祐介)

遺物の整理(実習IB)、発掘(実習IB)、先史考古学、遺跡に関する講義(文化財各論I)、思い返すと学生時代の考古学の授業は、殆ど宗基先生に教えていただきました。発掘実習では、休憩室で通りがかりに私たち学生のお菓子をつまみ食いしていた先生が忘れられません。教員になってからは、時々宗基先生の研究室からひきたてのコーヒー豆の香りがして、その度に爽やかな朝を感じていました。研究、授業、学科運営など沢山のことを教えていただき、いつもお世話になってばかりでしたが、本当にありがとうございました。  
(星野玲子)



(撮影者 小林恭治)

## 卒業生からの贈る言葉

助手  
米山由夏

宗墓先生、ご退職おめでとうございます。学部生から博士後期課程までの長きに渡り、ご指導いただき誠にありがとうございました。学部4年の時に、他大学で行われている勉強会をご紹介くださったおかげで、エジプト考古学者になるための道が開けました。子供の頃からの夢であったエジプトの発掘調査に約10年間携わることができていたのは、先生が自身の経験をもとに日頃からお話しくださったアドバイスのおかげです。重ね重ね御礼申し上げます。

令和2年度修了  
山田明子

学部2年の専門教科で、先生が執筆なさった紀要の一部を拝見しました。そこにはパキスタン東部バローチスターン地方の先史土器の写真が掲載されていました。日本の縄文時代にあたる年代でありながら縄文の造形とは正反対の、緻密な土を轆轤で薄くシンプルに成型し、高温で固く焼成した器体に様々な動物文様や幾何学文様が施された土器類で、それまで全く類例を見たことのないものでした。一瞬でこの土器について研究したいと思いました。社会人入学で先生より私の方が年上ですし、出来が悪く、先生としてはご自分の指導した学生とはお認めにならないかもしれませんが、私にとっては終生の恩師と研究テーマとの出会いでした。

平成30年度卒業  
川名祐希

宗墓先生、ご退職おめでとうございます。先生の指導は厳しく、そして優しくとてもわかりやすいものでした。口頭試問の際に、報連相がきちんと出来ていなかったことを叱責されましたが、あの時先生から言われたことは今も胸に置いています。私は先生にとって良い生徒ではなく、大学で学んだこととは全く違う職についていますが、鶴見大学で先生にご指導いただいたことは私にとって本当に良い糧となりました。本当にありがとうございました。

平成30年度卒業  
成澤 亮

宗墓先生ご退職おめでとうございます。先生には在学中だけでなく、卒業後も度々気にかけていただき、それを支えに努力することができました。ありがとうございました。

これからもお身体に気を付けて、益々ご活躍されますことをお祈りいたします。本当にお疲れ様でした。

令和2年度卒業  
齊藤ひまわり

定年退職おめでとうございます。

長い間お疲れ様でした。

ゼミでは大変お世話になりました。

これからもお変わりなく幸福と健康が続きますようお祈り申し上げます。

令和2年度卒業  
高本晴加

ご退職おめでとうございます。

先生には、言葉ひとつ、漢字ひとつの意味をよく考えよ、とご教授いただいたことをよく覚えています。

またご指導戴く機会をいただきましたなら幸甚に存じます。

今後ともどうぞお身体にお気をつけてお過ごしください。

令和3年度卒業  
加藤菜々

宗墓先生は本当に知識が豊富で、たくさん専門的なことを教えて頂けて為になりました。

宗墓ゼミに入って良かったと今でも思っています。お世話になりました。

## 令和4年度 実習Ⅳ巡検旅行について

## 令和4年度実習Ⅳ国内コースaについて

緒方啓介

令和4年度実習Ⅳ国内コースaは、新型コロナウイルスの感染防止を考慮して「長崎・佐賀・福岡の史跡をめぐる」と題して、近藤祐介先生も同行して3泊4日の九州方面の巡検を実施し、事前レポートと事後レポートの提出を予定していた。新型コロナウイルス第7波の爆発的感染拡大を受けて、残念ながら7月に実習Ⅳ履修者14名全員を自主コースとすることを決定した。特に今回は今春退任された石田千尋先生も長崎で合流して、ご専門の出島で特別講義をしていただく予定となっていたため中止となったことは誠に残念ではない。

8月末日までに巡検計画書を提出し、12月31日までに巡検報告書を提出した。

来年こそ、新型コロナウイルスの影響を受けずに巡検旅行が催行できるように祈念する。

中止となった九州地方巡検の行程は、下記のとおりである。

	都市	巡検地
1日目	東京 長崎	羽田－長崎－原爆資料館－ 大浦天主堂・グラバー邸
2日目	長崎	出島－崇福寺－興福寺－ 諏訪神社－長崎県立歴史文化 博物館
3日目	長崎 佐賀 福岡	有田町・茂正工房－佐賀県立 陶磁器資料館－吉野ヶ里遺跡
4日目	福岡 東京	観世音寺－九州国立博物館－ 太宰府天満宮－羽田

## 令和4年度実習Ⅳ国内コースbについて

矢島律子

教員：矢島律子 西澤美穂子

例年は6泊7日の巡見であるが、新型コロナウイルス感染症の状況が落ち着かない中での実現を目指して、今年度は3泊4日に日程を短縮し、その分、十分な予習を行なって臨めるように準備を進めた。

以上のように予定していたが、6月から7月にかけて新型コロナウイルス感染状況が急速に悪化し、今年度の実習Ⅳ巡検国内北海道コースは急きょ中止、全員自主コースに変更となった。

4年生はもちろんのこと、解説や講義を依頼していた国立アイヌ民族博物館や千歳市教育委員会の面々も残念がられていた。

4年生には、将来ぜひ時間を作って北海道を訪れてもらいたい。予習としてしっかり事前調査をしたことは無駄にはならないはずである。テーマは「北海道の歴史と自然および文化財の活用」である。

巡検先と日程は以下の通りである。

9月6日(火)

羽田空港午前10時出発、新千歳空港午前11時30分到着。

貸し切りバスにて(以下道内の異動はすべて貸し切りバス)道央自動車道を通り、昼食後小樽市総合博物館・運河館へ。

見学後、札幌市内へ。札幌市内で宿泊。

9月7日(水)

朝9時ホテルを出立し、江別市にある北海道博物館及び北海道開拓の村を見学。昼食は江別市旧ヒダ工場「EBRI」で昼食。

午後札幌市に戻り、北海道大学総合博物館見学。終了後札幌市内宿泊。

9月8日(木)

午前9時ホテル出発、支笏湖国定公園ビジターセンターへ。見学後水中遊覧船に乗船。

昼食後、白老町の国立アイヌ民族博物館・ウポポイへ。学芸員による講義受講後見学。終了後、苫小牧宿泊。

9月9日(金)

8時45分ホテル出立、千歳市埋蔵文化財で学芸員による解説と世界文化遺産への経緯説明を受講。10時30分キウス周堤墓遺跡群へ。学芸員の解説のもと遺跡見学。終了後、サケのふるさと千歳水族館へ。

昼食後、新千歳空港へ。午後4時30分新千歳空港を出発。飛行機で17時ごろ羽田空港へ帰着、解散。

## 文化財学会 春季講演会・秋季シンポジウム報告

### 令和4年度春季講演会

#### 「仏教・道元・寺院

#### — 研究者の学んできたこと —

報告 3年 筒井誠也

令和4年度文化財学会春期講演会は、6月4日(土曜日)に「仏教・道元・寺院—研究者の学んできたこと—」と題し、2020年まで12年にわたり宗教学などを担当され、現在は曹洞宗の新宿区養国寺と木更津市東泉寺の住職を務められる、本学元教授の下室覚道氏を講師に迎え、対面とオンラインを併用したハイブリッド形式にて開催された。

講演の冒頭では、今なお拡大が続く新型コロナウイルス感染症の現状と関連して、古代から中世の感染症の流行を紹介された。そして、降りかかる災難は、欲・怒り・無知などの煩悩に人が圧倒された時に起き、全て人の業(ごう)によるものと示された。また、災難を越えた後の時代における技術的・文化的な人類の発展を例に、災難による絶望の後に待つ希望についても示された。

講演の前半では、仏教研究のあり方について話された。まず、宗教の定義は様々で宗教学者の数だけ存在することを示され、その一例として、岸本英夫氏の「宗教とは人間生活の究極的な意味を明らかにし、人間の問題の究極的な解決に関わりをもつと、人々によって信じられている営みを中心とした文化現象」という定義、また同氏が宗教研究を主観的に行う神学的研究・宗教哲学的研究と、客観的に行う宗教史的研究・宗教学的研究に分類したことが紹介された。そして、宗教研究には様々な立場があり、信仰心を持つ研究、無神論者として研究などを説明された。この例として、キリスト教徒の父を持つ岸本氏が無宗教を買ったことを闘病記録の『死を見つめる心』から示された。また宗教学は、19世紀後半の欧州諸国が、植民地支配を行う中で多様な宗教と邂逅し、その比較・検討を研究する中で成立した学問であると説明された。下室氏の専門とする仏教学も19世紀中頃に欧州で誕生したインド学から成立したもので、日本では明治の廃仏毀釈や欧州の研究の影響により

大学で講義されるようになったことや、宗派ごとの「宗学」の存在も説明された。また戒律について、他国では厳しい一方、日本では寛容であることが紹介された。その理由として、日本においては宗教の精神性に重きをおく点や、明治5年に公布された太政官布告での僧侶への制限解除を挙げられた。この宗教の精神性と関連し、建学の精神や宗教と大学の関わり、先人の研究、下室氏の体験を例に学びの精神や向き合い方も示された。さらに下室氏の研究者としての立場から、高等学校教育における道元禅師や曹洞宗・臨済宗に関連した記述について批評された。道元禅師と自己を重ね合わせるというテーマでは、下室氏が研究してきた道元禅師の教えや精神性の魅力を仏教との出会いの話も交え解説された。

講演の後半では、寺院と文化財をテーマに話された。近年、文化財の継承が難しくなっており、寺院もその例外ではなく、各宗派約30~40%の寺院が廃されていると紹介された。下室氏も葬儀の件数から高齢化を感じ、それによる寺院の存続を危惧されていた。また、新型コロナウイルス感染症の流行による寺院の運営形態の変化と文化財の継承について、ご自身が住職を務められる東泉寺と養国寺、その他の宗教施設を例として紹介された。

講演の最後には、近年の若年層を取り巻く環境、人生の変化について養老孟司氏の言葉を紹介され、締めめの言葉とされた。



(講演される下室覚道先生)

## 令和4年度秋季講演会 「沖縄のムラをみる」

報告 3年 佐藤翔大

令和4年度文化財学会秋季シンポジウムは、11月6日(土曜日)に「沖縄のムラをみる」と題し、本学文学部非常勤講師の市川清士氏、中部大学准教授の山本貴継氏、本学准教授の鈴木一馨氏の三氏を講演者に、本学教授の宗基秀明氏を総合討論の司会に迎え、対面とオンラインを併用したハイブリッド形式にて開催された。

市川氏の講演は「琉球の風・水・土―石垣島の自然環境を中心に―」と題し、琉球列島の自然環境と集落立地について、石垣島を中心に話された。沖縄の河川は床勾配が急で流路延長が短く貯留能力が小さいため、降雨や洪水による河川流量の変化が大きく、浸水被害や干ばつ・渇水による被害が常襲すると示された。また、琉球列島の地質は、本島北部が中生代頃に形成された古い石灰岩で、その他はサンゴが隆起して出来た琉球石灰岩であり、琉球石灰岩地域では淡水を得ることが難しく、土壌が薄いことから水田耕作に適していないことを説明された。現代においては、上水道が整備されたため井戸は使用されていないが、定期的に整備が行われていることから水や井戸の重要性を窺い知ることが出来ると説明された。

山本氏の講演は「地籍図と現地調査から見た沖縄の「ムラグシ(村立て)」」と題し、「ムラグシ」により形成された沖縄県域の集落・村落を象徴する構造の実態と成立について、現うるま市の南風原村の地籍図を用いながら話された。説明では、現在、沖縄の伝統的景観とされている格子状の集落の姿は近世の地割制度により成立したもので、それ以前の姿は不明とされた。一説には、風水が格子状の集落に影響したとされるが、根拠が少なく検討の必要があるとされた。また、泥岩や火山活動により形成された基盤層上にサンゴ礁や石灰岩層が積層した地質を基に、基盤層の特性を反映する沖縄の土壌について説明され、地域ごとに分かれる酸性とアルカリ性の土壌分布から動植物の生態や地域の農作物の特色についても説明された。現地調査については、斜面、低湿地、湧水、山林、墓地などの特徴から南風原村の「元島(旧集落)」の痕跡を探す話がされ、その地域的特色と宅地形

状の変化から「ムラグシ」の過程について説明された。

鈴木氏の講演は「宗教的性質で見た沖縄のムラ空間」と題し、宗教は文化的な環境であること、沖縄のムラ空間は「クサテ」思想や、17世紀頃から広がった風水により宗教的性質があることが話された。「クサテ」とは村落の背後にある山丘や森で祖先の埋葬地でもあるとされ、祖先の霊による「村おそい」と呼ばれるものが村落を守護すると説明された。また風水の好悪が村落の判断基準となり、「クサテ」観と重複して村落空間の宗教的性質を形成したが、現在ではムラ空間が宗教的性質を持つという意識はほとんど消失していると示された。

総合討論では、井戸をつぶすと崇られるという話について、市川氏が琉球において水はいかに大切なのかということに結びついていると説明された。また山元氏が沖縄のムラでは酸性とアルカリ性の水の分布が混在しており、人々はそれらの水を使い分けて生活していると示された。「ムラグシがなければ現在はどうなっているか」という質問に対し、山元氏が早くに土地を失い農業的に破綻した可能性を示され、さらに生活優先の点から風水ありきではないとも示された。また「クチャ(海底の泥土)による赤瓦の数は少ないのか」という質問に対し、戦前の首里城を例として、まだらに葺かれることが本来の姿に近いと説明された。また、鈴木氏が東アジアの色彩文化の観点から、現在の首里城のように建築物の全てが赤色というのはおかしいと指摘された。「御嶽の神について知りたい」という質問に対し、鈴木氏が御嶽は琉球王府がムラに強制的に設置したものだが、何が祀られているかは不明であると示された。

そして最後に、集団が同じ世界観を共有し、そこでの生活で生み出されるものが文化となるのだと司会の宗基氏がまとめられ総合討論を終了した。



(総合討論の様子)

## 研究部会報告

### 歴史考古学研究部会

歴史考古学研究部会は、昨年度は新型コロナウイルスの影響により活動を停止していましたが、本年度の4月からの対面授業の再開に伴い、研究部会としての活動も再開いたしました。屋内作業では、先輩方がこれまで採集した遺物の拓本の作成や、発掘調査報告書の閲覧などにより、考古学や発掘調査への知見を深めることを目標に掲げて活動してきました。巡検では、6月に東京国立博物館へ、11月に横浜ユーラシア文化館へと足を運び、部会員が各々の知見を深めることができました。また、多くの部会員が神奈川県や埼玉県の発掘事業に積極的に参加し、有意義な研究活動に努めました。本年度は外部へ赴くことがあまりできませんでした。来年度は外部での巡検を活発に行い、考古学を学ぶ上でも重要な「実際に見る・触れる事」を中心に活動していこうと思います。

### 美術工芸研究部会

美術工芸研究部会は、絵画や彫刻など美術品や工芸品などを展示している博物館、美術館の巡検を行い、見聞を広めながらより深く知識を得ることを主な目的として活動しています。

今年度は、緒方ゼミ生の4年生9名、3年生8名、大学院生3名の総勢20名で活動を行っています。主な活動内容としては、例年では夏期休暇期間に開催される展覧会に研究部会全体で巡検を行うところ新型コロナウイルス感染の拡大により、断念し、東京国立博物館で開催された『日中国交正常化50周年記念 特別デジタル展「故宮の世界」』を始めとした展覧会に各自で行き、個々の興味に応じたテーマに沿って活動を行いました。

また、巡検に加え新型コロナウイルス感染拡大以前は、春や夏の長期休暇期間を利用し、京都を中心に関西地方の研究旅行を行っていましたが、こちらも感染状況を鑑み中止。そのため、新型コロナウイルス感染拡大以前に行っていた全体での研究テーマを決定し研究を行う活動内容を変更し、各々が設定した研究テーマに沿って活動を行いました。

### うるし研究部会

うるし研究部会の部員は2年生から4年生までの11名である。活動は漆芸作品の制作と、漆の産地や漆器産業の見学である。

作品の制作は、大学院生の指導を受け、夜光貝や鮑貝の薄貝を図案の形に切り出し、漆で貼り付ける螺鈿の技法や、漆で文様を描きその上に金粉を蒔く蒔絵の技法を用いて、各自の立案したデザインを実現している。

今年度の産地見学は、輪島塗で有名な石川県輪島市の工房見学を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大の為、中止とした。

来年度の活動は作品の制作及び、産地見学である。制作した作品は卒業制作展で展示する予定である。来年度の産地見学は、石川県輪島市の工房見学を予定している。



(卒業制作展の様子)

### 宗教研究部会

私たち宗教研究部会は、仏教、キリスト教、神道などの様々な宗教に関する理解を深めるために活動を行っています。メンバー全員が4年生であるため、集まって活動することが難しい状況でしたが、部会員それぞれが興味のある宗教について個人での研究を中心に活動を進めてきました。

11月には、古代オリエント博物館で開催された特別展「ヒンドゥーの神々の物語」の見学を行い、ヒンドゥー教の神々や、世界観を学びました。

文化財学会 令和3年度決算

収入の部 (令和3年度)		支出の部 (令和3年度)	
会費	377,000	講演会費	108,241
研究助成金(大学)	150,000	事務消耗雑費通信	90,182
研究助成金(同窓会)	200,000	会誌印刷費	590,260
会誌印刷補助費	113,482	会報印刷費	51,810
雑収入(会誌収入含)	11	部会補助費	0
前年度繰越金	4,076	次年度繰越金	4,076
合計	844,569	合計	844,569

令和3年度 会誌積立金決算

収入の部 (令和3年度)		支出の部 (令和3年度)	
前年度までの積立金	542,924	会誌印刷補助費	113,482
		次年度繰越金	429,442
合計	542,924	合計	542,924

資産目録総額

銀行預金(令和3年度)	
学会費	179,636
会誌積立金	429,442
合計	609,078

文化財学会 令和4年度予算

収入の部 (令和4年度)		支出の部 (令和4年度)	
会費	420,000	講演会費	90,000
研究助成金(大学)	143,000	事務消耗雑費通信	25,000
研究助成金(同窓会)	200,000	会誌印刷費	550,000
前年度繰越金	4,076	会報印刷費	60,000
		部会補助費	30,000
		備品費	8,000
		予備費	4,076
合計	767,076	合計	767,076

令和4年度 会誌積立金予算

収入の部 (令和4年度)		支出の部 (令和4年度)	
前年度までの積立金	429,442	次年度繰越金	429,442
合計	429,442	合計	429,442

令和5年度の年間行事予定

●春季講演会

日時：6月3日(土)  
 会場：未定  
 テーマ：「江戸城から品川台場へ～近世における築城・土木技術の継承～」(仮)  
 講師：富川武史氏  
 (品川区立品川歴史館学芸員)

●秋季シンポジウム

日時：11月4日(土)  
 会場：鶴見大学会館(仮)  
 テーマ：「朱印船時代の陶磁文化」(仮)  
 講師：矢島律子氏  
 (鶴見大学文学部文化財学科教授) 他

鶴見大学文化財学会会則

1. 本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2. 本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3. 本会は文化財に係る人文・自然科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進しかつ親睦をはかることを目的とする。
4. 本会は総会を年一回開く。ただし、必要に応じて随時に会長がこれを招集することができる。
5. 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
  1. 研究等の発表
  2. 講演会の開催
  3. 開始・会報等の編集作業
  4. 研究部会の活動
  5. HP上での広報活動
  6. 親睦その他の事業
6. 本会に次の役員を置く
  1. 会長(1名)は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
  2. 委員(若干名)。委員は諸事業の企画運営に携わり、会員間で互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
  3. 本会の監督者は、文化財学科専任教員から選出する。
7. 本会の経費は会費(年額千五百円)、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。
  1. 大学院生及び実習助手の会費は、年間千五百円とする。
  2. 専任教員の会費は年間千五百円とする。
8. 会費を3年間滞納したものは、退会とする。
9. 本会の事務所は下記におく。  
 〒230-8501  
 神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1番地3号  
 鶴見大学6号館文化財学科合同研究室

- 付 平成11年10月16日から発足する。  
 付1 平成16年4月1日 一部改正  
 付2 平成23年4月1日 一部改正  
 付3 平成27年4月1日 一部改正  
 付4 令和5年4月1日 一部改正

編集後記

無事、文化財学会報第24号を発行することができました。ご執筆下さった皆様に、篤く御礼申し上げます。また、今年度をもって宗基秀明先生がご退職されます。先生の今後のご健勝と、ご研究の益々のご発展をお祈り申し上げます。  
 (会報一同)

連絡先

〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1番地3号  
 鶴見大学 文化財学会  
 URL : <http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/bunkazaigakkai/index.html>  
 E-mail : [Bunkazaigakkai@tsurumi-u.ac.jp](mailto:Bunkazaigakkai@tsurumi-u.ac.jp)